被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁 えにし

教訓が、いのちを救う。
3.11 DENSHO ROAD
2024 vol.12

大船渡市立博物館
地域の地質や津波の歴史紹介

市民グループ「SAY'S東松島」代表の山縣さん
岩手県立山田高等学校
震災伝承ネットワーク協議会
新連載 伝承ロードをゆく 第1回 福島県いわき市～広野町
釜石市唐丹町・三つの津波を伝える石碑群
市民一丸で災害乗り越える いわき市
かわまちてらす閖上
道の駅そうま



シーパルピア女川（女川町）

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構



地域の地質や津波の歴史紹介

大船渡市立博物館

大船渡市立博物館は1955年開館で、東北の地方都市の中では歴史のある総合博物館です。大船渡市と陸前高田市、住田町のいわゆる「気仙地域」の歴史や自然、文化を紹介しています。東日本大震災以前から東北太平洋岸を襲った津波の歴史を紹介してきました。現在は震災伝承施設も兼ね、市内の被害や復興の過程を捉えた写真パネルなどを展示しています。

総合博物館と震災伝承施設を兼ねる大船渡市立博物館

常設展示の総合テーマは「大船渡 その海と大地」。シアターでは常設展示の概要紹介の他、震災をテーマにした「荒れ狂う海～津波常習地・大船渡～」を上映しています。大船渡市には震災で地震から約30分後に津波が襲来しました。映像では市民が撮影した震災の写真や動画を活用。明治・昭和の三陸地震津波、チリ地震津波と震災の津波の特徴や違いについても紹介しています。

地質展示室では古生代の地層の巨大なレプリカが目を引きます。大船渡市はセメントの原料となる石灰が産出されますが、石灰岩の起源は水中生物です。太古の昔、赤道よりも南にあった大地が移動してせり上がり、現在の三陸ジオパークの南側を形成したといわれています。石灰岩からはサンゴの化石などが見つかっています。

考古民俗展示室では、モリや釣針など、縄文の昔から現代に至るまでのさまざまな漁具が展示されています。大船渡市には三つの国指定史跡をはじめとする貝塚が点在し、その出土品などから、海とともに歩んできた地域の歴史が学べます。

貴重な地震計も展示

大船渡を育んできた豊かな海も時に荒れ狂います。考古民俗展示室には「荒れ狂う海 津波」をテーマにした常設展示があります。明治・昭和の三陸地震津波、チリ地震津波、そして震災の被害を絵図や写真、浸水図などで紹介。震災で津波が押し寄せる生々しい様子の写真もあります。市街地を望む定点写真は1996年ごろ、震災直後の3月13日、翌年3月11日から23年3月11日まで1年ごとに撮影した写真が並び、復興の足跡が分かる展示内容です。

貴重な地震計も展示されています。地面の揺れを東西・南北・上下に分けて観測し、その揺れ幅をインクで記録する仕組み。1994年まで大船渡測候所で使われていました。アメダスの発達により、この測候所は2006年に廃止されました。

開館は午前9時～午後4時半（入館は午後4時まで）。月曜（祝日の場合は翌日）と年末年始は休館し、臨時休みもあります。入館料は一般300円で高校生以下無料。



所在地／岩手県大船渡市末崎町字大浜221-86
TEL0192-29-2161

学校と連携し震災伝承図る

大船渡市立博物館スタッフの皆さん



左から佐藤貴裕さん、古澤さん、鈴木館長、村田さん、主任の佐藤拓美さん

大船渡市立博物館は1982年に現在地の碁石海岸の高台に移転しました。碁石海岸と穴通磯は三陸ジオパークのジオサイトとなっており、風光明媚な風景が広がります。博物館、ならびに隣接する碁石海岸インフォメーションセンターの両施設はジオサイトの拠点施設にもなっています。博物館は震災で、建物や展示物に大きな被害はありませんでした。

「三陸沿岸の歴史をひも解く上で津波は重要な出来事」と語るのは鈴木満広館長。「当館は震災前から地域を襲った津波の伝承に取り組んできた。震災後はシアターや常設展示に加え、企画展示として震災の被災状況写真展をこれまで3回開催し、回ごとに展示写真を変えるなどして紹介してきた」と振り返ります。

主任学芸員の古澤明輝さんは「一口に三陸の津波と言っても同じ状況ではない。総合博物館として地震や津波のメカニズムをかみ砕いて、より分かりやすく紹介していけたらと考えている」と語ります。

展示の新設や充実

東北地域づくり協会（仙台市）の震災伝承活動市町村支援事業で大船渡市は5年計画のうちの3年目に当たっています。館長補佐の佐藤貴裕さんは「事業で頂戴した寄付を活用し、展示の新設や充実を図っていきたい」としています。

震災から13年が経過し「一見、語り尽くされたかなという感じがある」と係長の村田匠さん。「だからこそ次代を担う子どもたちに伝えていかなければならない。ただ津波は怖いというだけでなく、海の恵みで発展してきたまちの歴史も教えられれば」と強調します。

鈴木館長も「当館は教育機関であり、学校と連携しながら子どもたちに震災を伝承する取り組みを常に考えていきたい。と同時に、観光客はもちろん市民にも気軽に足を運んでもらえる博物館でありたい」とアピールしています。



これまで大船渡市を襲った津波の歴史をパネルで紹介



地域の地質を説明する岩石の標本を展示

大船渡市立博物館の主なイベント（今年9～11月ごろ）

企画展「縄文貝塚と釣針」

大船渡市内の貝塚遺跡からは動物の骨や角などで作られた、さまざまな漁具が出土しています。企画展では、その中でも代表的な釣針にスポットライトを当て、当時の海の生業に迫ります。

日程／8月10日(土)～12月8日(日)　**会場**／特別展示室

その他／「東北文化の日」に合わせ、10月26日(土)・27日(日)、11月3日(日・祝)は入館無料になります

▶ 展示解説会

企画展を担当した学芸員が解説します。入館料が必要です。

日時／12月1日(日) ①10:30～②13:30～

会場／特別展示室

申し込み／事前申し込み不要。開始時間までに展示会場に集合してください

▶ 釣針づくり体験会（予定）

シカの角を使った縄文の釣針づくりを行います。また、製作した釣針で実際に魚を釣ってみます。

日程／10月20日(日)〔釣針製作〕
10月27日(日)〔釣り体験〕※荒天時は延期または中止

会場／多目的ホール〔釣針製作〕
会場未定〔釣り体験〕

被災経験、ありのまま伝える

市民グループ「SAY´S東松島」代表の山縣さん

SAY´S（セイズ）東松島は東日本大震災による津波被害が甚大だった東松島市野蒜地区を拠点に、伝承活動や防災教育に取り組んでいる市民グループ。代表を務める山縣嘉恵（やまがたかえ）さんは津波で自宅が流され、生活が一変。「将来起こるかもしれない災害への備えに、何らかの形で役に立ちたい」と市民目線で被災経験を伝えています。



東日本大震災復興祈念公園にある震災遺構「旧野蒜駅」で震災直後の様子を紹介することもあります。「立ち上げ時の思いを大切にしたいので、今後も今の5人で活動します」と山縣さん



山縣嘉恵さん

仙台市出身の山縣さんは結婚を機に東松島市へ。夫、息子、義理の母と家族4人で暮らす自宅は、野蒜海岸までわずか600メートルの野蒜地区にありました。大きな揺れの後、山縣さんは息子と義理の母とともに内陸の避難所から野蒜小（震災当時）の体育館に行きました。「すでに人がいっぱいだったため、外の出入り口にいました。『津波がもう来ている』と近くにいた男性に教えてもらい、私たちは校舎3階に駆け上がり助かりました」と津波襲来時を振り返ります。

自宅や自家用車は津波で流失。生活の見通しが立たない中、山縣さん一家は塩釜市に賃貸アパートを見つけ、引っ越しを決断。「被災者それぞれが生きていくために、生活できる所で仮住まいの避難生活をするしかない状況でした」とつらい心情を明かします。

アパートがみなし仮設住宅になり塩釜市に住んでいた山縣さんは、仙台市地域防災リーダーとして活動している知人から「とても役立つ講座がある」と女性防災リーダー養成講座の受講を勧められました。「自分たちの生活再建で精一杯で、最初は受講に前向きになれませんでした」と話します。知人の熱心な勧めもあり講座を受けると「目からうろこの情報ばかり。防災についてもっと知りたい」と、2016年の防災士の資格の取得につながりました。

防災士の資格取得が転機

次第に「震災を経験した市民目線で、地震の発生から津波襲来、生活再建を伝え続けなくては」という気持ちが芽生え、20年12月にSAY´S東松島を立ち上げました。メンバーは山縣さんと夫、長男を中心に、女性防災リーダー養成講座の受講を勧めてくれた知人を含む5人。

伝承活動では被害状況だけではなく、震災時に何が起き、人々はどのような行動を取ったのか、自身の経験を踏まえ、ありのままを伝えています。「地震直後の避難行動や生活再建の方法など、何が正解だったのか分かりません。ですが、生きてさえいれば何とかなります」と強調します。

防災に関するワークショップを企画。メンバーの中の4人でバンドを組み、茶話会やマルシェなどで震災にちなんだ楽曲を披露。枠にとらわれない伝承活動を続けています。

「メンバーのうち3人は仕事をしています。時間調整を上手に行いながら持続的な活動で、1人でも多くの方の防災意識を高め、災害が起きた際にお役に立てたら」



東松島市震災復興伝承館で、全国自治体からの派遣職員名板を解説



ガイドマップを手に笑顔を見せる左から佐々木茉莉花さん、上林美玖さん、佐々木恵麻さん

石碑マップと説明パネル作製

岩手県立山田高等学校

岩手県立山田高等学校（伊東理俊校長）は山田町と連携し、「総合的な探究の時間」（ふるさと探究）を活用して町内に点在する過去の津波の石碑を調査し、これらをまとめたガイドマップを発行したほか、石碑の脇に説明パネルも設置しました。現在も石碑のガイドツアーや町おこしにつながる活動を展開。高校生の意見が町に新たな息吹を吹き込んでいます。

２０１９年度、当時の１年生がその後の３年間を通じ、ふるさと探究で過去に町内を襲った津波と石碑の調査を実施しました。

町内には災害の教訓を刻んだ石碑が点在しています。そこで石碑のパンフレットを発行したり、ガイドツアーを開いたりして広く周知するとともに、石碑の文を読みやすくするために説明パネルを設置することにしました。

先輩たちの思いを継いで22年度に入学した1年生がガイドマップと説明パネルの作製に取り組みました。石碑の場所に足を運び、碑文を解読するなど授業を進め、23年2月にガイドマップが完成。3月に説明パネルが順次設置されました。

ガイドマップはＡ４判カラーで町内14カ所の設置場所と石碑名称などが、また、山田町を襲った津波と被害概要を掲載しています。

今につながる教訓

「石碑はかすれ、先人の方々が伝えようとしていたことが失われそうだった」と振り返るのは、今は3年生になった上林美玖（みく）さん。同じく3年の佐々木恵麻（えま）さんは「現代語訳するのが大変だったが、高い所に逃げろなどと今につながる教訓が書かれていた」と語ります。

現在はマップや説明パネルを活用し1年生がガイドツアーを担当します。ツアーは町民に参加を募ります。昨年度ガイドを務めた2年の佐々木茉莉花（まりか）さんは「高齢の方が多く私たちより詳しいので教わることが多かった」と言います。「石碑は見るだけでは駄目。内容を読み、建てられた目的を知れば意義が分かる」と2年の佐々木真菜（まな）さんは強調します。

3年生の2人は地元での就職を志望。それぞれの志望職種には震災伝承に関する仕事もあり、「仕事を通じて今後も震災を伝えていければ」と話します。2年生は本年度秋に、陸前高田市の東日本大震災津波伝承館で、海外から来た高校生と交流を図る活動が控えており、今から楽しみにしています。



ガイドツアーで参加者を案内する生徒たち

各地の学び・備えを有機的に繋ぐ

震災伝承ネットワーク協議会

東北地方整備局、青森県、岩手県、宮城県、福島県、仙台市、復興庁で構成する「震災伝承ネットワーク協議会」。東日本大震災の実情や教訓を伝える各地の遺構や石碑、施設などを「震災伝承施設」として登録してネットワーク化し、被災地を訪れる人たちが現地で効果的・効率的に学ぶために役立つ情報などを発信しています。



高田松原津波復興祈念公園

行政の枠を超え設立

東日本大震災の被災地では、震災遺構の保存、慰霊碑や追悼施設の整備など、震災の実情と教訓を次世代に語り継ぐ「震災伝承」の取り組みが活発に行われています。各地の取り組みをネットワーク化することで教訓をより効果的・効率的に学べる仕組みを構築しようと発足したのが「震災伝承ネットワーク協議会」。2018年7月に東北地方整備局と青森、岩手、宮城、福島各県と仙台市による行政主体で設立され、22年2月から復興庁も参画しています。

東日本大震災の被災の実情、教訓を伝える津波被災碑や震災遺構、当時の映像や写真を展示する伝承館といった施設を「震災伝承施設」として登録。こうした震災伝承施設や復興祈念公園が連携してネットワーク化することで、訪問者と現地の人々との交流促進や地域創生、地域の防災力強化も目指しています。

19年8月には民間主導による産学官民が連携した「一般財団法人3・11伝承ロード推進機構」（P8）が設立されました。

344施設が登録

震災伝承施設は①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当する施設。24年8月29日現在で344施設が登録されています。

統一的な情報発信や来訪される方々が円滑に目的地に到達できるよう第3分類の施設では、統一のピクトグラムを用いた標識で案内するほか、印刷物やウェブサイトでも施設の情報発信にピクトグラムを活用しています。

また施設関係者が集まって状況を確認し、展示、伝承活動のノウハウや課題を共有する「震災伝承施設交流会議」を開催しています。

さらに「一般財団法人3・11伝承ロード推進機構」とも連携して教訓のアーカイブ化や防災教育、パネル展の開催、復興ツーリズムといった啓発活動などに取り組んでおり、9月に仙台市で行われた土木学会全国大会でも震災伝承施設等を視察する見学会が行われました。



パネル等による伝承活動（震災対策技術展）

"教訓が、いのちを救う" 3・11伝承ロードを形成

震災伝承施設 第3分類



青森

1. 八戸市みなと体験学習館

岩手

2. 津波遺構たろう観光ホテル
3. たろう潮里ステーション
4. 宮古市市民交流センター 防災プラザ
5. 田老防潮堤
6. 震災メモリアルパーク中の浜
7. 大船渡市立博物館
8. 久慈地下水族科学館 もぐらんぴあ
9. 3.11東日本大震災 遠野市後方支援資料館
10. 釜石祈りのパーク
11. いのちをつなぐ未来館
12. 大槌町文化交流センター おしゃっち
13. 震災遺構明戸海岸防潮堤
14. 島越ふれあい公園
15. 羅賀ふれあい公園
16. 東日本大震災津波伝承館（愛称：いわてTSUNAMIメモリアル）
17. 高田松原津波復興祈念公園
18. 野田村復興展示室
19. 山田町まちなか交流センター
20. 大船渡市魚市場
21. 陸前高田市立博物館
22. タピック45（旧道の駅高田松原）
23. 気仙中学校
24. 岩手県立図書館「I-ルーム」
25. 仕事と学び複合施設「イコウェルすみた」展示棟
26. 大船渡市防災学習館

宮城

27. 東日本大震災 学習・資料室
28. せんだい3.11メモリアル交流館
29. 震災遺構 仙台市立荒浜小学校
30. 石巻ニューゼ
31. 伝承交流施設 MEET門脇
32. 東日本大震災メモリアル南浜 つなぐ館
33. 唐桑半島ビジターセンター
34. リアス・アーク美術館「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示
35. 気仙沼市 東日本大震災遺構・伝承館
36. 津波復興祈念資料館 閖上の記憶
37. 岩沼市 千年希望の丘交流センター
38. 東松島市 東日本大震災復興祈念公園
39. 高野会館
40. 名取市震災メモリアル公園
41. 塩竈市津波防災センター
42. 石田沢防災センター
43. NHK仙台放送局
44. 山元町防災拠点・山下地域交流センター（1階 防災情報コーナー）
45. 山元町震災遺構 中浜小学校
46. 中浜小学校震災モニュメント「3月11日の日時計」
47. 名取市震災復興伝承館
48. 気仙沼市復興祈念公園
49. 石巻南浜津波復興祈念公園
50. 石巻市震災遺構大川小学校
51. 海の見える命の森
52. 東日本大震災慰霊碑（日和幼稚園被災園児慰霊碑）
53. 石巻市震災遺構門脇小学校
54. がんばろう！石巻看板
55. 南三陸町東日本大震災伝承館 南三陸311メモリアル
56. 命のらせん階段（旧阿部家住宅）
57. 蒲生なかの郷愁館

石巻南浜津波復興祈念公園

福島県復興祈念公園

福島

58. アクアマリンふくしま
59. いわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11いわきの東日本大震災展」
60. いわき市地域防災交流センター 久之浜・大久ふれあい館
61. 相馬市伝承鎮魂祈念館
62. 福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」
63. 小峰城
64. みんなの交流館 ならはCANvas
65. いわき震災伝承みらい館
66. 東日本大震災・原子力災害伝承館
67. National Training Center Jヴィレッジ
68. 震災遺構浪江町立請戸小学校
69. とみおかアーカイブ・ミュージアム

※2024年8月29日現在

震災伝承施設と案内標識





震災伝承施設は右記①～⑤いずれか1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりと行った、来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」にランク付けしています。日本語と英語で施設名を表記し、津波と施設をかたどった絵文字（ピクトグラム）を加えた案内標識も設置されて国内外の旅行者へ分かりやすい目印となっています。

学びや備えに役立つ情報を発信

青森県
青森県防災ハンドブック「あおもりおまもり手帳」▼

岩手県
いわて震災津波アーカイブ ～希望～▼

宮城県
みやぎオンライン伝承館▼

福島県
3.11伝承ロード ふくしま▼

仙台市
新たなメモリアル施設に向けた検討を進めています▼

復興庁
るるぶ特別編集 東日本大震災伝承施設ガイド▼

東北地方整備局
震災伝承館▼
わくわくスクール▼
出前講座▼

問／震災伝承ネットワーク協議会事務局
（国土交通省東北地方整備局企画部）
TEL022-225-2171

3・11伝承ロード推進機構
発足5周年・震災伝承施設紀行文

伝承ロードをゆく

3・11伝承ロード推進機構は、今年発足5周年。この機会に当機構職員が、あまり知られていない「第1分類」「第2分類」を中心とする震災伝承施設を取材し、現地の方々の思いなどの見聞を記録しながら「3・11伝承ロード」の震災伝承を支える施設の意義や役割、価値を改めて考えます。

第1回　福島県いわき市～広野町

取材・執筆・写真／3.11伝承ロード推進機構　業務執行理事　原田 吉信



学術的にも貴重な断層

スタートの地は北か南か。悩んだが、熱い思いを伝えるためには南から行こうと、福島県いわき市と決めた。ゴールの青森まで到達できるか、われわれメンバーのやる気にかかっている。

初日7月25日の空模様はすこぶる悪く、雷が鳴りいつ土砂降りになるかわからないような暑い日だった。

まず訪ねたのは、第2分類の井戸沢断層（**写真①**）。東日本大震災のちょうど1カ月後の2011年4月11日に発生した「福島県浜通り地震」で出現した断層だ。いわき市では震度6弱を観測したこの地震の震央は田人地区で、震源の深さは6キロと浅くマグニチュードは7．0。震央近くの井戸沢断層が、正断層により西側が沈降した。

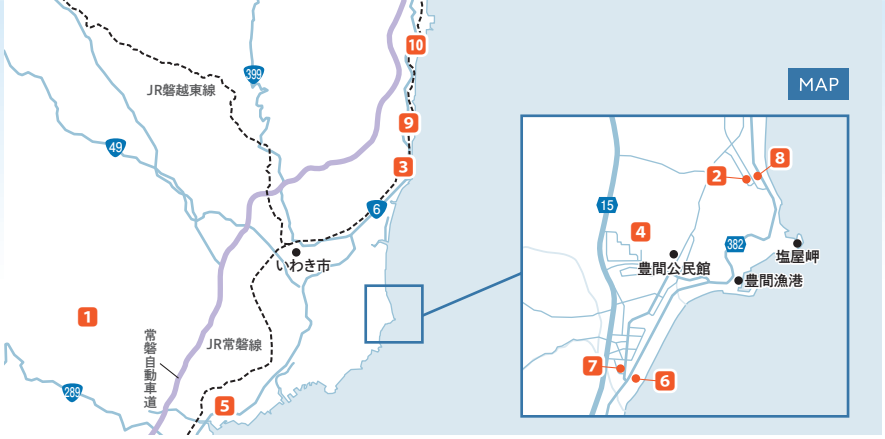

①

実はこの断層に3年前も来ていて、その際にも案内いただいた元いわき市田人支所（現いわき市美術館副館長）の下山田誠さん、さらに今回は田人

3.11伝承ロード推進機構

2019年8月に発足して以来、東日本大震災の時事や教訓を伝えるために被災地の震災伝承施設（P6・7に関連記事）とともにそのネットワークを活用し、情報発信やセミナー、パネル展開催による啓発活動、研修会、受託事業といった被災地へのツーリズム、震災活動を映像で残すアーカイブなどを柱に活動を行ってきました。24年8月に5周年を迎えたことから、これまでの活動を振り返り、今後の活動を展望する取り組みについても検討していきます。

1 井戸沢断層 いわき市田人町黒田字塩ノ平222
問／田人地域振興協議会(田人支所内) TEL0246-69-2111
2 いわき震災伝承みらい館 いわき市薄磯3-11
問／TEL0246-38-4894
3 道の駅よつくら港(震災伝承看板)
いわき市四倉町5-218-1　問／TEL0246-32-8075
4 豊間公園 いわき市平豊間字大作72
問／一般財団法人いわき市公園緑地観光公社
TEL0246-43-0033
5 岩間防災緑地
いわき市岩間町岩下地内
問／福島県いわき建設事務所 TEL0246-24-6106
6 豊間防災緑地 いわき市平豊間字塩場地内
問／福島県いわき建設事務所 TEL0246-24-6106
7 豊間地区東日本大震災慰霊碑
いわき市平豊間字市下町149-1
問／ふるさと豊間復興協議会 TEL0246-98-6100
8 薄磯防災緑地 いわき市平薄磯一丁目、三丁目地内
問／福島県いわき建設事務所 TEL0246-24-6106
9 久之浜防災緑地
いわき市久之浜町久之浜東三松地内
問／福島県いわき建設事務所 TEL0246-24-6106
10 ひろの防災緑地 広野町下浅見川
問／福島県富岡土木事務所 TEL0240-23-5558



教訓・伝承の道「3・11伝承ロード」をたどり、東日本大震災の事実や記憶、経験を学ぶ



②


④


⑤

地区振興協議会の蛭田秀美さんと語り部の斉藤富士代さんに同席いただき、お話を伺った(**写真②**)。

斉藤さんによると、断層が出現した震災直後から多くの研究者、専門家が訪れ、13年たった今でも多いときには月50人もが見学に来るという。

断層から200㍍ほど西側にある斉藤さん宅前には見学用の駐車場、ご自宅隣に休憩スペースも設けられ、見学者に、いつ何の目的で訪れたかを断層訪問者記録票に記入してもらっている。今年4月にはテレビ取材もあったようで、断層への関心は決して低下していない。

宣伝しなくてもこの断層に今でも見学者が途絶えないのは「正断層での断層崖の出現例がほかにあまりなく、今でも2㍍のずれをはっきりと確認できる貴重なジオ資源であることが大きい」と、下山田さん。

この断層を調べた多くの研究者や専門家から「国の天然記念物級の重要な資産」と聞き、地域の振興協議会内からも「観光資源に」との意見が上がったことも。国の天然記念物の指定はまだないが地域振興協議会ではこの資源を守るために記念の植樹を行い、見学者のために月1回の草刈りをしているといい「全てボランティア」と伺って頭が下がる思いだ。

断層を目視できるように、16年には剥ぎ取り標本2枚が作成された。以前伺った際には田人支所にあったが、より多くの方に見ていただけるように22年4月に移設された。現在は1枚が福島県立博物館に、もう1枚がいわき震災伝承みらい館に展示されている(**写真③**)。


③

縦3㍍、横2㍍と大きく地層の石や土砂、断層のずれがはっきりとリアルに分かる標本は圧巻だ。いわき震災伝承みらい館に来たら、ぜひ見てほしい。

支援への感謝新たに

続いて道の駅よつくら港へ。道の駅駅長白土健二さんに、第2分類の震災伝承看板を案内していただく(**写真④**)。

津波で流された船が直接衝突して建物が破壊され、いつ再開できるか分からない状況だったこの道の駅は、被災が少なかった会津の人たちの支援もあって、1カ月後には店頭販売ができるようになった。その後、ヤマト福祉財団復興支援によりリニューアルオープンを果たしたのが翌年8月。「被災した『3・11』よりもリニューアルオープンした『8・11』の日付に強い思いがある」という。

駅の海側の柱に貼られた700枚の陶板(**写真⑤**)1枚1枚を当時支援してもらった人の声と思っているそうで「本当にありがたかった」という白土さんの言葉が印象的だ。

地域の財産「防災緑地」が各地に
人と街、景観を守り、交流を育む

公園に災害時の備え

この日の最後に、いわき震災伝承みらい館の語り部小野陽洋さんに案内していただいたのは豊間地区に造成された住宅地の一角にある豊間公園。

これまで私が見てきた震災公園の中でもとりわけ規模が大きく、その設備にも驚く。ソーラー発電街灯やマンホールトイレ、トイレ背後の備蓄倉庫はもちろん、三角屋根にテント生地を張ると防災パーゴラになる東屋、非常用発動発電機、断水時の給水機能がある水道施設と、災害における避難所としての備えが半端ではない。

４００人が収容可能なドームシェルター（**写真⑥**）は全天候型のグラウンドで、普段から遊びからスポーツ、地区のお祭りまで天候を気にせずに利用しているとのことだった。

地域の思いを反映

翌26日は快晴。この日は、防災緑地を中心に巡る。

沿岸部に整備された防災緑地は、津波から人や建物を守る「防災」、交流、自然とのふれあいの場となる「地域振興」、緑豊かな「景観・環境の再生・形成」の３つの機能があり、堤防や道路と組み合わせた「多重防御」の防災機能が共通する特徴だ。一方、整備計画には地域の特色が反映され、その個性は緑地ごとに種々様々となっている。

いわき建設事務所の塩谷圭太郎さん、菅野靖成さんとともに、第２分類の岩間防災緑地を訪ねた。

植栽されているのは防潮・防風効果があるとされるクロマツをはじめ、クヌギやコナラ、エゴノキ、スダジイ、タブノキなど（**写真⑦**）。地域に愛され続ける緑地をつくるため、住民の要望を聞きながら生物多様性に配慮し、この岩間防災緑地には近くの神社からも樹種が寄せられているという。

目を引くのが、ＮＰＯ法人勿来まちづくりサポートセンターが東京藝術大学などの協力を得て設置した卵形のモニュメント「きみと」（**写真⑧**）。住民たちが被災した当時の経験を語るインタビューの音声や映像などを収めたタイムカプセルも設置され、２０３１年３月11日に開けられる予定だ。

緑地内には東日本大震災の津波で破壊されたかつての防潮堤の一部もモニュメントとして設置され、記憶を風化させまいとする地域の強い思いが伝わってくる。

記憶を伝え続ける

続いて訪れたのは豊間防災緑地。サーファーたちの駐車場としても利用され、防災緑地が住宅街への迷惑駐車を減らす一助にもなっているようだ。「豊間、薄磯、沼ノ内の３地区では『復興さくらの会』による植樹も行われ、開花時期や特徴の異なる５品種の桜が植えられている」と菅野さん。

この豊間防災緑地のすぐ近く、豊間中央集会所の敷地に第２分類の豊間地区東日本大震災慰霊碑（**写真⑨**）が建立されている。

豊間区区長橋本和彦さん（**写真⑩**）に伺うと、慰霊碑を囲む柱が10本なのは当時、地区にあった町内会の数だという。震災前に６３０だった世帯数は震災後２３０まで減ったものの、その後子育て世代を中心とする地区外からの移住の働きかけに力を入れ、２００世帯もの移住者を呼び込んだ。毎年３月11日に開かれる慰霊祭では、橋本さんたちが「私たちには忘れたくても忘れられ


⑥



小野さんの車のラッピングにも驚いた。荷台をオープン化したオフロード仕様の軽ワゴンに「いわき七浜イケメンプロジェクト」のキャラクターがデザインされ、かなり目立つ。いわき市にある7つの海を擬人化したキャラクターを通じて、いわき七浜をPRしているという。


⑦


⑧


⑨


⑩



⑪

ない」という言葉から始まる慰霊碑の文言を読み上げ、新しい住民たちにも当時の経験を伝え続けている。

思い出を守る

その足で、いわき市内で最も被害が大きかった薄磯地区に向かう。

津波に遭いながらメンテナンスによってよみがえった「奇跡のピアノ」のエピソードでも知られる豊間中学校があった場所に、薄磯防災緑地が整備されている。

豊間中学校の校舎を震災遺構として保存するか否か議論があったといい、校舎の保存は断念されたものの、「豊かな人間性」の言葉が刻まれた石碑と位置を示す緯度・経度の石碑、校舎の当時の形状をかたどった敷石と、防災緑地の至る所に豊間中学校の思い出を見ることができる（**写真**⑪）。


⑫



⑬


⑭

そして11・2㌔といわき管内で最も面積の広い、第1分類の久之浜防災緑地。津波被害を受けながら倒壊を免れた「稲荷神社（秋葉神社）」（**写真**⑫）が隣接し、境内に「東日本大震災追悼伝承之碑」（**写真**⑬）が建立されている。碑に刻まれた「大地震が起きたら大津波が来る。」「直ぐ逃げろ、高台へ。一度逃げたら絶対戻るな。」の赤字の教訓が胸に迫る。

官民連携で森づくり

第2分類のひろの防災緑地（**写真**⑭）は福島県内で最も早い2016年12月に完成した防災緑地だ。



⑮

全国700名ものボランティアによって植樹された木々は、今回巡った緑地と比べても生長が顕著で手入れが行き届いている。

驚くのは、この緑地の維持管理に「ひろの防災緑地サポーターズクラブ」と呼ばれる地域の方も参加されていること。

事務局でもある富岡土木事務所の島実さん、佐藤力裕さんによると、クラブには町内外の85名が登録しているという。月2回の活動日には、緑色ののぼりを掲げて（**写真**⑮）枝打ちや花壇の掘り起こし、ベンチの補修といった作業を官民協働で行っている。

防災緑地が守り育てられてきた背景に地域の方々の尽力があることを改めて実感した。

先人の思いが刻まれる

釜石市唐丹町・三つの津波を伝える石碑群

釜石市唐丹町本郷には明治、昭和の三陸地震津波と東日本大震災の三つの津波を物語る石碑が並んで立っている場所があります。石碑には津波の記憶を後世に伝え、次に備えるようにと、当時を生きた人たちの思いが込められています。



左から昭和、明治の三陸地震津波を伝える石碑

明治三陸地震津波を悼む「海嘯（かいしょう）遭難記念之碑」は犠牲者の33回忌に当たる1928年に建立されました。そばの案内板に全文の現代語訳が記されています。

「日が暮れてから地震が3度ほどあり、午後8時ごろ、海の方で突然雷のような音がし、間もなく荒れ狂う大波が高々と押し寄せてきて地区の800人の命を奪い、300の民家を破壊した」

「人々が働いて築いた財産もこの町も一瞬のうちに破壊され、真っ暗な波間に漂う兄弟姉妹の叫び声が亡霊のように耳に残り、わずかに生き残った人も二十数人だけで疲れ切って言葉にならないほどである」

碑文の一部は震災の津波ではがれ、流失しました。碑は震災後、修復し補強されましたが、流失部分は津波の威力を伝えるためにあえて直さず、そのままにしたそうです。

向かって左側に立つ「昭和八年津波記念碑」は、昭和三陸地震津波の石碑です。震災の津波で石碑そのものが流失し、一時行方不明になっていました。

こちらの石碑には、被災時の様子は記されていません。一文が大きな字で刻まれています。「大きな津波を乗り越えて、負けない雄々しい心をもって、復興に向けて進もう」（意訳）という内容です。現代でも通用する強いメッセージを打ち出しています。

小中生のメッセージ

東日本大震災の「津波記憶石」は昭和八年津波記念碑の斜め後ろにあります。一般社団法人全国優良石材店の会と釜石市が中心となり、2012年に建立されました。

石碑は五つで中央にあるメインの碑には「伝えつなぐ大津波　2011　3・11」と記されています。メインの碑に向かって左右各2基ずつ配置された石碑には当時、地区の小学4年～中学3年の子どもたちによるメッセージが刻まれています。



東日本大震災の石碑は5基がセットで並ぶ

「つなみてんでんこ。自分で自分の命をまもれ。じしんが来たらすぐ高いところへ」（小学4年男子）

「100回逃げて、100回来なくても　101回目も必ず逃げて」（中学2年女子）

次代を担う子どもたちが震災で得た教訓を飾らず、自分の言葉でストレートに訴えています。

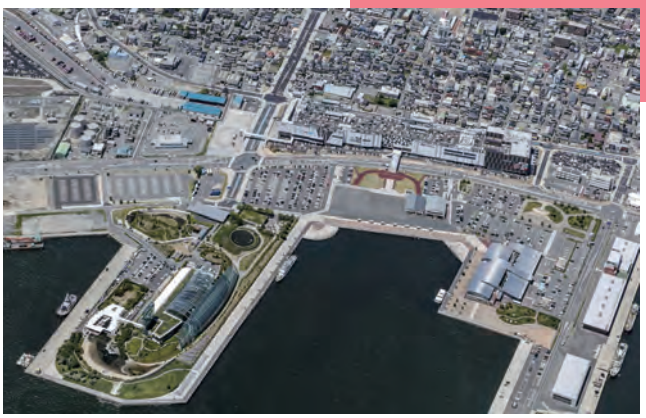
唐丹町は明治、昭和の津波を経て、震災では最大30メートルほどの津波に襲われました。時代を越えても訴えたい思いは同じです。



所在地／岩手県釜石市唐丹町本郷地区

危機管理モデル都市実現へ

市民一丸で災害乗り越える　いわき市



「アクアマリンふくしま」や「イオンモールいわき小名浜」が立地し、いわき市の観光の要となっている小名浜港背後地地区

福島県浜通り南部の臨海都市で福島県最大の面積を誇るいわき市は、「逃げ遅れゼロ」「災害死ゼロ」を掲げた危機管理モデル都市の実現に取り組んでいます。震災以降、2度の大きな台風を経験したことを踏まえ、防災教育や市民参加型の防災訓練などを通し、市民一丸で災害を乗り越える文化を育んでいます。



お話を伺った方
内田広之市長

いわき市は震災で最大8・5㍍の津波が襲来し、沿岸部に甚大な被害を及ぼしました。人的被害は直接死293人、関連死138人、行方不明者数37人。建物被害は全壊7902戸、大規模半壊9253戸に上ります（2024年2月現在）。

市内出身の内田市長は1996年に文部省（現文部科学省）に入省。幼児教育課に在籍し、認定こども園の制度づくりなどに携わり、2021年の市長選に出馬して初当選しました。

「震災から13年半がたち、土地区画整理事業などハード面の整備が完了した一方で、災害公営住宅で暮らす方の高齢化や孤立といった新たな課題が浮き彫りとなってきています。そういった方々の生きがいづくりなど、心の復興についてはこれからが正念場だと感じています」と話します。

いわき市では2019年の令和元年東日本台風（関連死含めて死者14人）、23年の台風13号（死者1人）と、近年も立て続けに災害に見舞われていることから、「逃げ遅れゼロ」「災害死ゼロ」を掲げた施策にも力を入れています。



震災時の被災状況（薄磯地区）

22年8月に創設した「いわき市登録防災士」では、いわき市在住で防災士の資格を持つ市民に登録を働きかけ、災害が起きた場合には高齢者への避難の呼び掛けや避難所の運営を担ってもらう制度で274人（6月30日現在）が登録しています。

若者の流出抑制へ

震災後、いわき市が示した復興計画の中で重点施策に挙げられたのが、約9割が津波で浸水した小名浜港背後地地区の復旧です。2013年から約5年をかけた再開発では、大型ショッピングモールを誘致し、親水エリアの「アクアマリンパーク」と市街地を一体的に整備した、新たなまちが誕生しました。

こうしたインフラの整備がほぼ完了したタイミングで就任した内田市長は、若者が戻ってきたいと思えるまちづくりの実現を掲げています。「いわき市には15の工業団地があり東北有数の工業都市です。そのため就職を希望する高校生は地元に残る傾向がありますが、約6割の若者は学校を卒業後、市外で進学または就職しています。今後も企業誘致や本社機能移転を積極的に進めていき、雇用の確保や子育て世代が暮らしやすい生活環境の整備を進めたい」と強調します。

いわき市最大の津波被害に見舞われた薄磯地区の「いわき震災伝承みらい館」は開館から4年がたち、現在は首都圏からの教育旅行での利用が増えているといいます。

「語り部の講話や実物資料の展示を通して、今後も震災の脅威を次世代に伝えていきたい。常磐湯本町にある『石炭・化石館　ほるる』も一緒に見学してもらうことで、エネルギー産業の歴史や問題点について一体的に学ぶことができるのが強みです」と内田市長。

「震災以降、2度にわたる大型台風を経験し、市職員の災害対応能力の向上を感じています。災害はいつ起こるか分かりません。自助・共助・公助の精神であらゆる世代が支え合えるまちをつくっていきたい」と話します。

名取川と街を見渡す堤防側帯上の商業施設

かわまちてらす閖上


かわまちてらす閖上がある広い堤防側帯上は散歩やサイクリングコースとしても親しまれています

東日本大震災で津波による大きな被害を受けた名取市閖上地区は、復興工事によるかさ上げや道路整備が進められ、2019年5月に「閖上地区まちびらき」が行われました。同時に、名取川に架かる閖上大橋近くに商業施設のかわまちてらす閖上がオープン。地区のランドマークの1つで、憩いの場になっています。

かわまちてらす閖上は市町村や国、民間の連携による河川空間を活用した事業「かわまちづくり」の一環で開設されました。名取川沿いに整備された幅の広い堤防側帯の上に建設された2棟と、堤防から降りた街側にある1棟、戸建4軒で構成。開業から5年が経った今は、飲食店や水産加工品店、酒造店、美容室、コインランドリーなど27店が集まっています。このうち8店は震災前から閖上地区で営業し、移転しました。

閖上で生まれ育った、かわまちてらす閖上代表の櫻井広行さんは「ここは多くの住宅が立ち並び、商店街やスーパーマーケットもある閖上の中心地でした」と震災前の様子を語ります。震災による大津波は名取川をさかのぼってあふれ、住宅などに流れ込みました。「多くの建物が押し潰されていました」と津波襲来後の惨状を明かします。

震災後、地元事業者らが仮設商店街の閖上さいかい市場を開設。本設の案も浮上しましたが、賛同者は少なく計画は頓挫。そのような中、かわまちてらす閖上の開設が決まり、仮設商店街で営業していた一部の事業者と、新規の事業者がテナントとして入ることになりました。

集客のため企画続々

コロナ禍が明け、さらなるにぎわいをもたらそうと多彩な企画を次々と実施しています。


周遊船「ゆりあげ丸」は民間連携の事業

2022年4月に、タイの三輪自転車トゥクトゥク(※)の運行を開始。市震災復興伝承館まで、名取川の堤防側帯上を無料で往復しています。翌年5月にはバーベキュースペースを開設。

さらに24年2月には「かわまち夜市」を5年ぶりに復活させ、以降、毎月第2土曜夜に開催しています。櫻井さんは「ここから仙台市街の明かりを一望できます。夜市の日に限らず夜景を楽しみ、おいしいものを食べたり飲んだりしてもらえたら」とPRします。

周遊船「ゆりあげ丸」(※)がかわまちてらす閖上発着で運航。水上散策が楽しめ、閖上地区の魅力を広めます。


トゥクトゥクで走行しやすい広い堤防

震災で自身の水産会社も甚大な被害を受けた櫻井さんは「震災後、生活や商売を続けられない、新たな建物を建設できないといった被災地もある中、新たなまちづくりが進められた閖上は恵まれている方だと思います。多くの方に、今の閖上を楽しんでもらいたいです」と前を向きます。

※運行・運航の日時やルートは随時確認を



所在地／宮城県名取市閖上中央1-6
TEL022-399-6848

第3分類(訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解のしやすさに配慮した施設)、第2分類(公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設)のみ紹介。

名取市

第3分類 ●**津波復興祈念資料館 閖上の記憶** 名取市閖上東3-5-1 ●**名取市震災メモリアル公園** 名取市閖上東2丁目・3丁目地内 ●**名取市震災復興伝承館** 名取市閖上東1-1-1

第2分類 ●**下増田神社** 名取市下増田字屋敷64 ●**閖上中学校遺族会 慰霊碑** 名取市閖上西1-25 ●**仙台空港** 名取市下増田字南原

名物料理でにぎわい創出
震災伝承コーナーを設置

道の駅そうま

国道6号沿いにある「道の駅そうま」は2003年4月にオープン。22年10月にリニューアルし、新しくレストランやスイーツショップができるなど、さらに魅力あふれる施設になりました。震災時に被災者を受け入れた経験から、防災資機材を備蓄するなど災害への備えも行っています。



相馬野馬追の「陣屋」をイメージした瓦屋根の建物

「道の駅そうま」は、当初地元の相馬商工会議所が運営していましたが、22年に契約が満了したことから一時閉館。その後シダックス大新東ヒューマンサービスが経営を引き継ぎ、同年10月にリニューアルオープンしました。

店内は地元で採れた野菜や果物、総菜類がそろう物産販売コーナーの他、相馬藩第34代相馬行胤さんが営む牧場の生乳を使ったソフトクリームが味わえる「殿様ミルクスタンドSOMA」、福島県産豚肉を使ったメニューを扱う「キッチンにったき」があります。



「東北中央自動車道ができて米沢方面からのお客さまも増えた」と話す大井さん

支配人を務める大井薫さんは南相馬市出身。高校卒業後に地元を離れ長年千葉県で暮らしていましたが、昨年Uターン。デパートのテナント管理などを行ってきた経験を生かして業務に当たっています。

「月2回販売している地元の原釜漁港で水揚げされたカレイの唐揚げが名物。これからもお客さまに喜ばれる店作りをしていきたい」と笑顔を見せます。

避難者を受け入れ

海岸から約4キロ離れた「道の駅そうま」は東日本大震災時、津波の直接的な被害はなく、瓦が落ちた程度ですみました。

当時を知る相馬商工会議所の菅野千香さんは、「沿岸部の住民100人ほどが道の駅に避難してきたため、売り場にあった商品や飲料を提供しました。ダンボールを床に敷いただけの室内で皆さん不安な一夜を過ごされたと思います」と振り返ります。

「道の駅そうま」は避難所としての指定を受けていませんでしたが、震災後に東北地方整備局磐城国道事務所から、発電機や灯油ストーブ、非常用トイレ、毛布などが支給されました。また停電時には手動で開閉できる災害対応型自販機を取り入れるなど災害への備えも行っています。

売り場に併設する道路情報館には「震災伝承コーナー」が設けられていて、津波により激しく変形した道路標識や、震災当時の状況を記したパネル展示などを通して、相馬市の被災体験と教訓を後世に伝えています。

「旬の野菜や果物、加工品を中心に品ぞろえを変えながら、いつ来ても新鮮さを感じられる店になれば」と大井さんは話します。



震災の伝承と災害に対する意識を深めてもらうことを目的に開設された「震災伝承コーナー」



所在地／福島県相馬市日下石金谷77-1
TEL0244-37-3938

相馬市・名取市の震災伝承施設

相馬市

第3分類 **●相馬市伝承鎮魂祈念館** 相馬市原釜字大津270

第2分類 **●相馬市防災備蓄倉庫** 相馬市坪田字宮東25 **●相馬港沖防波堤災害復旧事業完了祈念銘板** 相馬市原釜字大津270 **●震災伝承看板「津波被害から地域を守った〈相馬バイパス〉」** 相馬市光陽4-2-5 **●原釜尾浜防災緑地** 相馬市原釜外 **●震災伝承看板「『松川大洲・大浜地区海岸堤防』の復旧（相馬市尾浜）」** 相馬市尾浜字松川〈市道大洲松川線〉

Topics & Information

これからイベントがめじろ押し

10月と11月は「3.11伝承ロードNew Destinationプラン」における地域活性化フォーラム、当機構発足5周年記念シンポジウム、防災・伝承セミナーが仙台開催となるなど、当機構主催のイベントがめじろ押しです。
ぜひ、多くの方のご参加を期待しています。

● 地域活性化フォーラム

当機構では（一財）国土計画協会の支援を得て、2022年度から「3.11伝承ロードNew Destinationプラン」を実施中です。本事業は東日本大震災からの10年を契機に、新たな復興ステージのアクションとして「三陸沿岸道路」を活用して、観光コンテンツと震災伝承施設を融合させた地域活性化策を提案するものです。本年度に事業の最終年として、これまで実施したモニターツアーや検討会での議論を踏まえ、復興した新しい三陸沿岸地域の魅力について議論するフォーラムを開催します。

テーマ／「三陸の新しい魅力」～震災伝承施設と三陸沿岸道路の魅力と役割について～
①基調講演
東北大災害科学国際研究所・奥村誠教授
演題「未来に役立つ災害伝承のための三陸沿岸道路の役割」
②パネルディスカッション「女性が語る三陸の新しい魅力」
コーディネーター
石巻専修大経営学部・庄子真岐教授
日 時／10月2日㈬ 13:30～15:30
会 場／釜石市民ホール TETTO ホールB

● 5周年記念シンポジウム

今後の活動に向けて、より効果的なものとなるよう、これまでの活動を振り返り、災害（震災）伝承に対する役割や期待について報告します。

日 時／10月31日㈭ 13:00開場　会 場／仙台国際センター 大会議室「萩」
内 容／①開会 13:30
②あいさつ　主催者　代表理事　今村 文彦
来　賓　震災伝承ネットワーク協議会会長
③基調講演　演題「レジリエントな社会に向けて」（45分）
代表理事　今村 文彦
④活動報告「これまでの活動について」（25分）
業務執行理事　原田 吉信
⑤特別講演　演題「災害伝承のこれから」（45分）
理事　徳山 日出男
⑥閉会 15:45

● 防災・伝承セミナーin仙台

東日本大震災等の震災伝承の周知と啓発、防災力の向上への貢献を目的として、これまで福島、宮城、岩手、青森の4県で開催。今年は仙台市で開催。

テーマ／「（仮）震災伝承と観光」～（仮）震災伝承施設の魅力と観光への誘い、そして地域の活力について～
日　時／11月27日㈬ 13:30～15:30
会　場／仙台市戦災復興記念館 記念ホール
内　容／①基調講演　東北大災害科学国際研究所・柴山明寛准教授
演題「（仮）震災伝承施設の見どころ、展示の魅力」
②パネルディスカッション
コーディネーター　同研究所・佐藤翔輔准教授

いずれも参加無料

参加申し込み・問い合わせ
一般財団法人3.11伝承ロード推進機構
TEL022-393-4261

表紙

被災地を歩く

「震災遺構 旧女川交番」が隣接

シーパルピア女川（女川町）

JR女川駅前広場から望む女川港。「レンガみち」と呼ばれるプロムナードの左右には真新しい落ち着いた雰囲気の施設が並ぶ。シーパルピア女川は道の駅おながわを構成するメインのテナント型商業施設。町の観光・物産の拠点であり、町民の日常的な買い物をする場にもなっている。

シーパルピアのある町中心部は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた。シーパルピアに隣接する海岸広場には「震災遺構 旧女川交番」がある。鉄筋コンクリート造り2階建てで、津波襲来時には海中に埋まり、引き波で基礎部分のくいが引き抜かれ、現在の位置に横倒しになったといわれる。建物には漂流物がぶつかって壊れたものと思われる跡があるほか、漂流物などの残骸も当時のままの状態で残されている。



鉄筋コンクリート造りの建物が津波で転倒したのは日本で初めての事例といわれ、また、大規模な津波で倒壊・転倒したという事例は世界的にも珍しいとされる。遺構の周囲のパネルでは震災前の街並み、震災当時の様子、復興の歩みを紹介している。

この一帯の土地を盛り土によるかさ上げで海抜を5.4㍍以上にし、再び同程度の津波が発生しても、造成地が防潮堤の役割を果たすなど、減災を意識した構造だ。2015年に開業したシーパルピアは、震災前にあった町のシンボル施設「マリンパル女川」の後継はもちろん、町の新たな魅力を引き出すにぎわい拠点としての役割も担っている。



所在地／宮城県女川町女川2-60

伝承ロード縁　2024年9月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー
記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。　info@311densho.or.jp　FAX022-393-4271
無料